



新館長挨拶

はじめまして

松田知彦

この4月から館長を拝命しております。どうぞ、よろしくお願いたします。

さて、私事で恐縮ですが、文化財保護の世界に12年ぶりで戻って参りました。以前は、文化財（特に埋蔵文化財）保護行政に携わっていましたが、今回は言ってみれば文化財保護の現場に帰ってきた心持ちです。ちなみに本館は、現在のところ高知県で唯一重要文化財の公開に相応しい博物館等の施設である「公開承認施設」として文化庁長官に承認されておりますので、第一義的には文化財の保存と活用との観点としての機能が求められているのだと考えます。しかし、社会状況や国民的な要請もあり、博物館として多機能的な役割を求められつつあります。つまり、「地域における生涯学習、文化芸術活動、国際交流、ボランティア活動、観光等の拠点」「地域と共働して、地域作り、人づくりの核としての博物館」（文化庁）という役割です。そこで、今後の本館の活動方針を、自分なりにいくつか皆様にお示しして、就任のご挨拶にさせていただきますと思います。

① 地域との共働

本館は、南国市岡豊町に位置していますので、まずは地元の方々と深く接して

いくことが肝要です。幸い、前宅間館長に地域の方々と良好な関係を築いていただいていたので、この関係を益々充実させていくことが必要だと考えております。しかし、本館の性格から対象は全県下に及びます。ご承知の通り、本県では少子高齢化が加速的に進み、特に中山間地では限界集落という用語で表現されるような地域も出現しております。このような地域に残された文化財は、このままでは忘れ去られてしまう可能性があります。そこで、危機にさらされている県民共有の文化的財産を調査・記録・保存していくことが本館の使命の一つだと考えています。もちろん、地域の文化財は地域で守っていくのが基本ですので、市町村の方々と協力しながら進めていくのは言うまでもありません。人員、予算等限られた資源を有効に利用したいと思えますので、皆様のご理解・ご協力をよろしくお願い致します。

② 人材の育成

人をつくる三つの視点があります。「創造力・想像力の豊かな子どもを育てる」、「専門人材の育成支援」、「後継者や伝承者の養成」（文化庁）このうち、一番目には焦点を絞ってみます。現在本館では、学校教育関係で以下のようなご利用をいただいています。「学校来館対応」（46校 2,134名）、「出張派遣授業」（9校 871名）、「職場体験」（4校 15名）、数字はすべて24年度実績です。体験学習や展示見学等が主な内容ですが、そのほとんどは小中学校に限られています。これを、高等学校・専門学校等・大学と

いう社会に出る直前の若者に広げていきたいと思っております。

以前、文化財保護行政に携わっていたときから、「文化財の持つ力」、つまり、文化財保護が社会にどういうことで役立つかについて考えていました。あるとき、強烈な印象に残った出来事があります。四万十川沿いの地域に神楽を見に行った時のことです。土佐の神楽は、すべて重要無形民俗文化財に指定されていますので、調査を兼ねて行きました。踊りを舞っているお父さんの足下で年端もいらない子どもが太鼓を叩いていました。太鼓も上手だったので、そのとき脳裏にひらめいたことがあります。「あ、この子ここに帰ってくるな。大人になって地元を離れたとしても、いつかきつと帰ってくる、という確信が心中に湧きました。これ以上高知県の県力を削がないためには、どうしてもマンパワーが必要です。若者に地元に残ってもらわなくてはなりません。地元に戻ってきてもらうためには、もちろん生活の基盤となる産業が必要ですが、しかし、一番の力は、郷土に対する愛着ではないでしょうか。実は、この子が高校生になったそのとき、私が赴任した高校で偶然に再会しました。そして彼は今、地元の若者の中心的存在として活躍してくれています。これからの高知県を背負ってくれる人材を確保するために、地元に対する愛着を育てることが出来る。これが、文化財の持つ大きな力の一つだと思います。どうぞ、県民の皆様のお力添えを持って高知県・日本・世界のための人材を育てていきたいと考えていますので、今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

江戸時代の南国

— 地域資料にみる人々のくらし —

大黒恵理
野本 亮

「土佐」のなかの南国地域

南国地域は、北部の山地、南部の海、東部の物部川に囲まれた香長平野の大部分を占める穀倉地帯です。また、土佐東街道と伊予(愛媛)へ向かう土佐北街道(北山越え)が交差している交通の要衝でもありました。絵図に描かれた村々のように、人や物資の往来などから地域の特色を考えます。

江戸時代の南国地域について

戦国時代には長宗我部氏の拠点となり、現在は南国インターや高知龍馬空港がおかれるなど、古くから交通の要衝であった南国地域。今から約150〜400年前の江戸時代には、いったいどんな地域だったのでしょうか？
村の庄屋を勤めた家には、江戸時代に書かれた古文書や絵図が残されている場合が多くあります。くずした文字の解読は困難なこともあります。古文書からは多くのことが分かるのです。江戸時代の南国地域がどんなところで、村にはどんな人々が住んでいて、何を考えながらどんなくらしをしていたのか、一緒に古文書を見ながら考えてみませんか。(大黒)



日本全国を測量した伊能忠敬も南国地域を訪れています。一行は甲浦から室津、安喜などを経て南国地域の前浜に到着、種崎へと向かいました。「覚」(文化5年頃)



村の地下浪人が有馬温泉へ湯治に行くため、立川の番所を通る許可を求める書類です。山間部を通る険しい土佐北街道(北山越え)を通って行ったことでしょう。「差出」(江戸時代)

なんこくクイズ!

江戸時代の古文書の文字ってくずしてあって読みにくい! 下はどれも南国地域の地名だよ。読めるかな?



ヒント: 今と違う漢字を使っているものもあるね。



答えは
展示会場で!

自然と生きる

村には百姓や郷士のほか、博労(馬)を売り買ひする人、瓦焼(かぎ)きや紙漉(かみ)きの職人、あるいは漁師など、様々な人が自然の恩恵を受けながら生活をしていました。
一方、自然は時に(牙)をむくこともあります。災害に対処して人々はどうに対処してきたのでしょうか。自然と共存しながら生きた人々のようすを探ります。



これは大工の見積書。神社の修理にどれくらいのお金がかかるか計算したものです。「御宮積り書」(天保14年)



百姓は田畑を耕して年貢(今の税金)を納めていましたが、不公平にならないように、どの土地を耕すのかくじ引きで決めることもありました。「六十七番」とくじの番号が書いてあるのが分かりますか?

土地関係資料 (江戸時代)



子どもの誕生や節句、結婚や長寿祝いの時には親類を呼んで皆でお祝いしました。これはその時の記録です。今も昔も家族を大切に作る気持ちは変わらないのです。

「駒之助出生祝儀覚帳」(文化14年)ほか4点

金銭をメンバーから少しずつ集め、毎年順番に誰かがその全てをもらうことができる「衆議講」。まとまったお金が必要なときに便利でした。金銭を受け取った人には名前の上に日付が書いてあります。まだ受け取れていない人もいます!?

「衆議講申合并質田帳」(嘉永6年)



人と人とのつながり

江戸時代の人々は、他人とどのような関わりを持ちながら生活していたのでしょうか。通過儀礼の際には家族や親戚で集まってお祝いしたり、互いに金銭を融通しあったり、ふとしたことから口論をしたり。古文書からは、「身代」村「家」といった様々な枠組みの中に身をおきつつ、争ったり助け合ったりしながら生きていた人々のようすがうかがえます。



より便利に、より豊かに

より便利に、より快適に生きるため、人々は多くの工夫をしながら生活していました。村の中でルールを取り決めたり、お金を出し合ったりして神社の建物を修繕したり。そして、旅に出たり、和歌を詠んだり、相撲興行を行ったりと、生活の中に様々な楽しみを見出しながら、心豊かに暮らしていたのです。



村に住んでいる大勢の人々がお互い快適に過ごすためには、様々なルールを決めなければならないこともありました。これは、年中行事や通過儀礼の際の食事が豪華になりすぎないように取り決めたものです。

「吉凶諸事申合」(江戸時代)



銚尾山の金毘羅神社は船乗りたちの信仰が厚い神社。皆で金銭を出し合って、海上から目印にするための常夜灯を設置しています。

「奉願」(安政7年カ)

江戸時代の人々のくらしは今とどう違うかな?



当館展示案内キャラクター こうち君



宝永4年(1707)に起こった大地震と大津波では、南国地域も大きな被害を出しました。これは庄屋が村の被害状況をまとめた報告書の下書きで、多くの家が被害を受けたが村人は皆無事だったということが記されています。

「指出(宝永四亥年大變注進一巻)」(宝永4年)

塩分の多い土地を耕作地として使うための方法を記した古文書です。生産力を上げるため、様々な工夫を行っていたのです。

「潮田仕様」(江戸時代)



※古文書は全て宇賀家文書(南国市立図書館蔵、南国市保護有形文化財)

絵図上部に「里改田村支配釧尾御留山并同村支配宮田谷絵図」とタイトルが書かれています。「御留山」とは藩が所有していた山のこと。御留山では、勝手に木を切ることは禁じられていました。



海に近い里改田村の釧尾山には、海上安全のご利益のある金毘羅神社が建てられました。船乗りたちが海上から目印にするための常夜灯も設置されています。



←現在は常夜灯の台座と考えられる部分のみ残っています。



山神様をおまつりした小さな祠。今でも大切に守られています。



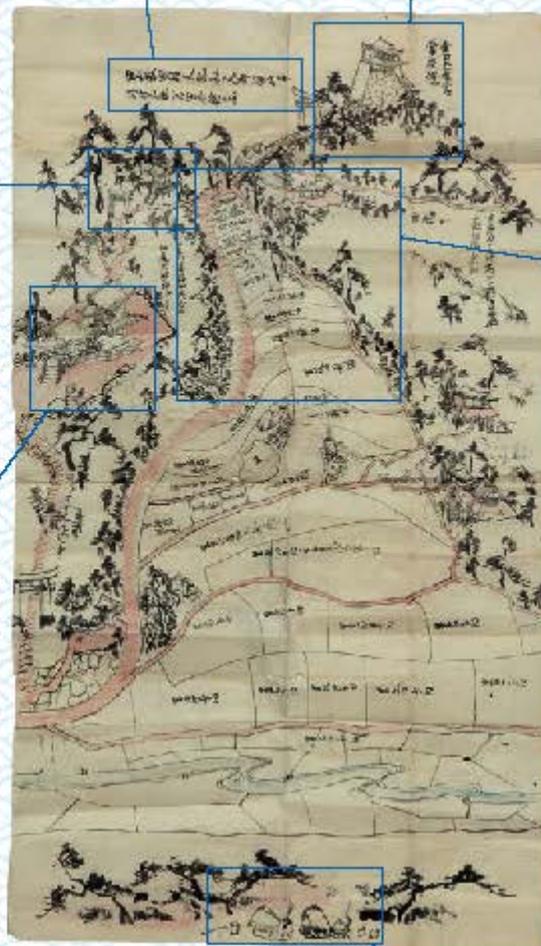
釧尾神社は里改田・浜改田と十市・下田の一部の人々から氏神として祀られていました。拝殿や鳥居の修理に関する古文書なども多く残存しています。



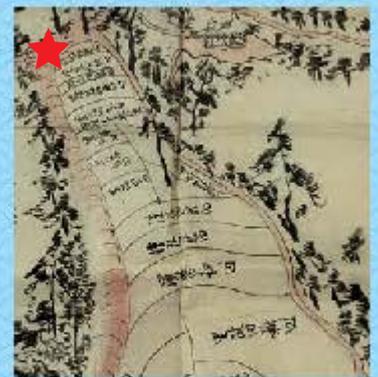
犬が描かれているのは拍犬かな？



釧尾神社の参道はとても険しい山道だよ！



描かれた南国 里改田
江戸時代には、藩がそれぞれの村の状況を把握するためや土地の境界争いを解決するためなど、様々な場面で絵図がつけられました。これは里改田の釧尾山を描いた絵図です。絵図を片手に、江戸時代のようにすべながら現地を歩くのも楽しいですよ。



山の斜面に畑が広がっている様子もちゃんと描かれています。



↑★の場所から南を見渡したところ。手前に段々畑が広がり、遠くには海が！

なんこくクイズ！

海辺に小屋が描かれているね。何をするための小屋なんだろう？

ヒント：何かをつくるための小屋だよ。



答えは
展示会場！



最近の収蔵資料から

猿田彦神社の陣貝

南国市下末松にある猿田彦神社は、地域の神様として江戸時代後期（文政8年）に創建され今日に至っています。戦乱が続いた時代には、神様の加護を期待して、地元の領主や村の有力者たちは、こぞって土地や宝物を神社に寄進しました。

同神社にも様々なものが寄進されていたと思われませんが、維新直後に寄進された陣貝は一際異彩を放っています。下の写真（陣貝）は、戊辰戦争に従軍した土佐藩兵が、会津若松城内より戦利品として持ち帰ったものと伝えられます。

陣貝とは、いくさの時、軍勢の進退の合図に吹き鳴らした法螺貝のことです。貝の突端を切って口金を入れて用いるのを常としました。また、持ちやすいように糸組みの螺緒を全体にかけて用いました。この陣貝は、梨地の蒔絵に、桐紋を彫り出した金具が装着されています。

当館の資料収集委員である久保智康先生によれば、「金具回りの製作には、

刀装具を専門とした彫物師が当たったものと思われる、製作年代は江戸前期（17世紀）ではないかとのこと。会津藩の武具（指揮用具）としてまず遜色ない逸品といえるでしょう。

本資料の寄進者は、土佐藩軍監兼断金隊長として戊辰戦争に従軍した池知退藏重利です。池知家は代々長岡郡西野地村（南国市）の郷士の家柄でした。身分の低い、村々に居住する郷士たちが数多く出撃した幕末期の動乱。村の神社に奉納された一資料から、激動の時代の断面を垣間見ることができま

（野本）



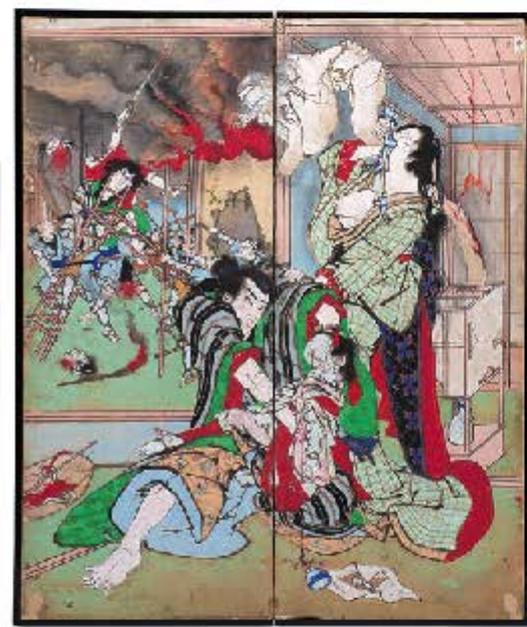
南国市保護有形文化財
平成24年度寄託品



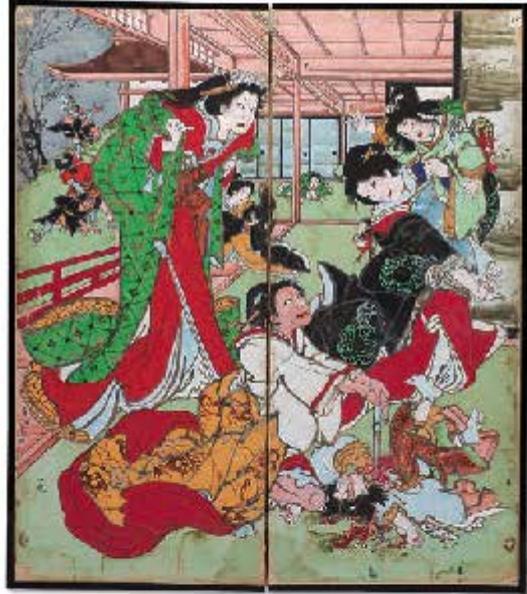
コーナー展

深淵神社の芝居絵屏風

8月1日(木)～9月3日(火)



門鳴の波阿傾城



御殿 萩代先羅伽

昨年引き続き、深淵神社（香南市野市町）より寄託された芝居絵屏風を公開します。全12点のうち、今年はこの2点を展示する予定です。鮮烈な赤が印象的な芝居絵屏風。その「恐ろしい美しさ」をご堪能ください。

（大黒）

考古

南国市田村の江戸文化
— 江戸の墓標 —

南国市にある高知龍馬空港の北西に土佐守護代細川氏の居館跡とされる田村城跡があります。ここには、桂昌寺（後に細勝寺と改める）という日蓮宗の寺がありました。現在は、空港拡張工事後に伊都多神社近くに移っています。

寺の境内に県内では見慣れない墓標が一基建っています。頭部が尖頭形をなし、正面の彫り込みの頂部は〇の形をしています。下部の蓮弁は、やや崩れた形のもの彫り込んでいます。断面は横からみると舟形ではなく長方形状をなし、安定させるため下部が広がっています。頂部は前にやや突出していますが、これは近世初期墓標の一つの特徴です。碑面中央には題目つまり「南無妙法蓮華経」を刻し、右下部に年号、左に月日を刻しています。刻された年号は、摩滅により判読しづらいますが、「承応三年（一六五四）」の紀年名があります。この墓標は、江戸が一七世紀前半に首都化した時期以降に造られたものです。近世都市江戸の墓制や葬制に関心をはらってきた筆者には、とても興味深い墓標です。



南国市田村細勝寺近世初期墓標

味深い墓標です。なお、この墓標と類似するものが、四万十町にもあります。（岡本）

歴史

長宗我部遺臣・桑名弥次兵衛の手柄書

学芸員の重要な仕事のなかに参考業務というものがあります。県民の皆様からの素朴な質問や、研究機関等からの調査依頼に対して、資料や情報を提供しながら問題解決のお手伝いをする業務です。

最近メールによる質問が随分増えてきました。私の扱うケースでは、圧倒的に長宗我部元親関連が多いのですが、次に多いのが、長宗我部氏の家臣団に関する質問です。

主家改易にともない、多くの一族一門衆、重臣層は土佐を離れました。他家に仕官した者も多かったのですが、意外にその後のことはよく分かりません。また、長宗我部遺臣のなかで、家系図や遺品等を今日まで相伝している家は、香宗我部家や中内家など数えるほどしかありません。従って特定の家臣の履歴を調べたいというご質問には窮することが多いのです。しかし、元親の重臣の一人、桑名弥次兵衛一代手柄書については、子の兵助に与えられた「桑名弥次兵衛一代手柄書」により、かなりリアルな履歴を知ることができます。昨年入交太郎氏よりご寄贈いただいた本史料は、原本の行方が分からない今、極めて貴重な写本といえます。



ちなみに弥次兵衛は、大坂夏の陣・八尾合戦で、藤堂家の侍大将として出撃。旧主・長宗我部盛親の部隊と戦って戦死します。手柄書はその後、寛永9年（1632）頃に執筆されました。（野本）

民俗

キャラクターは語る



こうち君 江戸時代バージョン

子ども向けの展示解説パネルをときどき頼まれます。そのときには、展示内容をわかりやすく、少ない字数でお伝えしよう心がけています。親しみやすいキャラクターを語り手とすることもあります。

はじめは展示ごとにオリジナルキャラクターを描いていました。平成15年の異界万華鏡展では百鬼夜行の「靴鬼」「羽釜鬼」、平成19年の龍馬・慎太郎展の「龍馬君」「慎太郎君」などです。しかし、オリジナルキャラの多くは展示が終われば消えてゆきました。展示のテーマに絞りすぎた造形だったからでしょう。

「もとか君」からは、デザイナーに描いてもらった本格的なキャラクターです。平成21年の兜展では「もとか君のかぶと指南」、平成23年の刀展では「刀指南」のパネルを作りました。長宗我部元親の若武者姿は、両方の展示に合っていたと思います。

「こうち君」は常設展のリニューアルで誕生しました。デザイナーによって原始時代から現代までのこうち君が描き分けられています。命の碑展では江戸時代バージョンをトレースして地震にふるえる姿などを描き加えました。江戸時代の南国展にもこうち君は登場しています。

もとか君やこうち君は、展示の内容をやさしく語るキャラクターとして、これからますます活躍してくれそうです。（中村）

第8回

岡豊山フォトコンテスト



毎年恒例となりました岡豊山フォトコンテストも第8回を迎え、今年も多数のご応募をいただきました。ありがとうございます。

見事最優秀作品に輝いたのは、前田龍夫氏の作品「岡豊山の春」です。

5月3日に入賞された方の表彰式を行いました。

最優秀作品を含む入賞作品を1年間当館で展示させていただきます。

次回も皆様のご応募をお待ちしております。

(濱田愛)

第4回

長宗我部フェス



前日までお天気が心配された今年の長宗我部フェスでしたが、当日は暑いぐらいの上天気に見舞われ、県内外から約1,500人の方にご来場いただきました。

今年も大分県戸次川から大友宗麟鉄砲隊にご参加いただきました。国崩しと呼ばれる大砲を持参し見事な演舞を披露してくださいました。夜は、関係者・鉄砲隊・一般参加者約100名による、「長宗我部の宴」が初めて開催され交流を深めました。

(濱田愛)

平成25年5月18日

いざなぎ流の里・物部が熱かった!



②いざなぎ流の里巡り(5.6)



③鍛冶屋の工場見学(5.26)



①いざなぎ流の神楽(5.5)

昨年のえびすの倉入れに続きオンザキ様の神楽を保存会の方々に再現して頂きました。他にも国立歴史民俗博物館の松尾恒一先生による講演と上映会や御幣切り教室も開催。大盛況でした。



④木挽き仕事の再現(5.26)



⑤猟師と鉄砲鍛冶に聞く(5.26)

4月から5月にかけて、香美市物部町において、NHK新日本風土記「高知神々と棲む村」上映会(4月20日)、いざなぎ流の里・物部(5月5・6日)、第2回旧大栃高校民俗資料一般公開(5月25・26日)をたて続けに開催しました。最初の二つは、いざなぎ流と物部川流域の文化を考える会主催で当館は共催、最後の一つは主催事業でした。

「観光名所でもないわずか3軒の集落に来てくれる人がいるだろうか?」「既に過去のものになった鋸鍛冶や木挽きの技術に関心をもってくれる人はいるだろうか?」担当者の心配は杞憂に終わりました。どの企画も熱心な参加者が集まり、地元の方々は質問攻めに。考え抜かれた技術や道具の工夫に集まった人たちは目を丸くして耳を傾けていました。

地域に伝わる知恵や技術をどのようにに未来へ伝えていくか、次の展開を思案中です。

(梅野)

図書館のご案内



高知県立歴史民俗資料館 研究紀要第18号

土佐の出土銭貨2—須崎市押岡土居の谷遺跡—
…………… 岡本桂典

寺石正路資料調査報告Ⅲ
寺石正路自叙伝『燈下與児談』上
…………… 野本 亮

[資料調査員報告]
浦戸湾の和船
—和船の建造を試みる方のために—
…………… 芝藤敏彦

A 4版 102頁 価格1,500円 送料 340円

- 郵便振替口座番号 01600-2-38806
- 加入者名 高知県立歴史民俗資料館
2冊以上のご注文はお問い合わせ下さい。

臨時閉室のお知らせ

平成25年10月10日(木)～10月18日(金)
12月9日(月)～12月16日(月)

3階総合展示室は特別展「備前焼—薪と炎が織りなす土の美—」展示替えのため上記の期間、閉室いたします。

岡豊風日(おこうふうじつ) 第82号
平成25年7月1日
編集・発行 (公財)高知県文化財団
高知県立歴史民俗資料館
〒783-0044 南国市岡豊町八幡1099-1
TEL 088-862-2211
FAX 088-862-2110
開館時間 午前9時～午後5時
休館日 年末年始12月27日～1月1日
臨時休館あり
観覧料 通常期(常設展)大人(18才以上) 450円・団体(20人以上) 360円
〔企画展〕常設展示込み500円
・団体(20人以上) 400円
※特別展は別に定めます
無料・高校生以下、高知県及び高知市長寿手帳所持者、療育手帳・身体障害者手帳・障害者手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者(一名)
印刷 共和印刷株式会社

http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~rekimin/
eメール: rekimin@kochi-bunkazaidan.or.jp

平成25年7月～9月の催し

企画展

会場>1階企画展示室

江戸時代の南国

—地域資料にみる人々の暮らし—

平成25年7月27日(土)～9月1日(日)

戦国時代には長宗我部氏の拠点となり、現在は高知道南国インターや高知龍馬空港が置かれるなど古くから交通の要衝であった南国地域。江戸時代には一体どのような地域だったのでしょうか。

里改田の庄屋を勤めた宇賀家に伝わる「宇賀家文書」(南国市保護有形文化財)や「笠ノ川村文書」など地域に残された古文書や古絵図から、当時の人々の暮らしを読み解きます。

また、南国地域にゆかりのある幕末志士・島村衛吉の資料や寺社に奉納された美術工芸品などもあわせて紹介。

夏休みには親子で身近な地域の歴史を学んでみませんか。



「笠ノ川村絵図扣」(部分)

展示室トーク ● 予約は不要です。

8月17日(土) 14:00～14:30

予告 秋の特別展—高知・岡山文化交流事業Ⅱ—

備前焼—薪と炎が織りなす土の美—

2013年10月19日(土)～12月8日(日)



水ノ子岩海底遺跡の備前播鉢

岡山県立博物館などが所蔵する備前焼の優品を3階総合展示室で展示致します。また、昭和52年に小豆島沖の岩礁水ノ子岩から引き揚げられた室町時代初期の海揚げりの備前焼も展示致します。

講演会

● 電話等で要予約

12月1日(日) 14:00～15:30

「備前焼『その伝統と創造』」

講師:備前焼人間国宝 伊勢崎淳氏

講座

● 電話等で要予約

11月2日(土) 14:00～15:30

「備前焼の世界」

講師:岡山県立博物館学芸員 重根弘和氏

11月16日(土) 14:00～15:30

「土佐国に流通した備前焼について」

講師:(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
調査課第3班長 吉成承三氏